

2014年（平成26年） 1月 684号

祈ること

マリノ E.デハクト Jr.

私は小学校の頃は神学生ではなかったですが中高生から大学までカトリック学校で勉強をしました。そこで学んだことで忘れられないものが一つあります。それは祈りで一日が始まり、祈りで終わることです。神学生になって“なるほど”とわかりました。神学院では寝坊をしなければ、神学生達は毎日朝の祈りを唱えています。けれども、聖堂にいても全ての神学生たちが真面目に祈っているわけではありません。眠くてたまらないので寝てしまう時もあるからです。そして何回も教えられたことは自分のことだけを祈っている神学生、修道者、司祭はよくないということです。私たちはほかの人たちのためにも祈らなければならないのです。みなさんも誰かのために祈っているでしょうか。

キリスト者として私たちは祈ることを大事にしたほうが良いでしょう。なぜならキリスト自身がどんなに忙しくても、祈る時間を作られたからです。弟子の一人が主イエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えて下さい」とお願いをしたことが聖書に書かれています。この出来事によって一番すばらしい祈りが生まれました。それは“主の祈り”です。キリストは「あなたがたが祈る時は、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。なぜなら長い祈りは神様が聞いてくれるというわけではないからです。」とはっきり言われました。祈る時一番大切なのは謙遜な態度だと言われています。それは自分の弱さを認めることであり、自分の罪を悟ることでしょう。神様の前に立つのは誰でもふさわしくありませんが、謙遜であれば私たちの祈りを神様は聞いてくださるでしょう。

私たちがミサに参加する理由は何でしょう。人によって違うかもしれませんが。ミサに参加しないと両親が怒るから、義務だから、仕方がないから、立派な信者に見られたいからなど。子供は一時間ほど我慢しているのかもしれませんが。このような理由ならばミサが本当の祈りになるのでしょうか。逆に私たちが主イエスキリストを非難した律法学者のようになってしまわないのでしょうか。回りの人達がほめてくれなくてもミサに参加しましょう。神様がちゃんと見てくださっています。もし私たちは何かを神様に捧げたいならば“心”を込めて捧げましょう。聖マルクの福音の中に出てきたやもめもそれを実行し、主イエスにほめていただきました。彼女は持っているものすべてを神様に捧げたというのは“お金”の意味ではありません。やもめの貧しさと弱さ全部神様にゆだねました。つまり彼女は神様を信頼して祈ったのです。もし私たちが神様を信頼

することができないならば、祈ることに意味はあるでしょうか。

私たちは弱い人間であっても神の国の建設のために役立つ者になれますように互いに祈り合って、聖母マリアの取り次ぎを願ひましょう。